

華嚴經普賢觀行法門について

鎌 田 茂 雄

一

華嚴經が普賢行を開顯するものであることは、經のなかで普賢菩薩の徳を讚嘆している箇所がいたるところに見られるし、また重要な諸品においては、普賢によって説かれていることから知ることができる。華嚴經を讀誦するものは、知らず知らずのうちに「普賢行」が華嚴經の中核であることを知らしめられる。大方広仏華嚴經 Mahā-vaipulya-buddha-avatamsaka-sūtra の經題の根本は「仏華嚴⁽¹⁾」ということであるが、この仏華嚴という意味を經のなかに尋ねて見ると、賢首品のなかに、

不可思議刹を嚴淨し、一切の諸如来に供養す。大光明を放つて、辺あることなく、衆生を度脱して亦限りなし。施戒忍進及び禪定・智慧・方便・神通等、是の如く一切皆自在なり。仏華嚴三昧の力を以てなり⁽²⁾。

とあるのにもとづくであろう。このなかで如来に供養するこ

とと、衆生をして度脱せしめることが、仏華嚴三昧力にもとづくのであり、それはとりもなおさず普賢行を代表するものでなければならぬ。仏華嚴は普賢行である。また「離世間品」では、

普賢菩薩、正しく三昧を受く。其の三昧を仏華嚴と名く⁽³⁾。とのべているが、普賢菩薩の三昧こそが「仏華嚴」であることを知るのである。仏華嚴をもつて一切を莊嚴するところに普賢行があるのである。華嚴經は別に「雜華⁽⁴⁾」とも呼ばれるのであるが、野や山に咲く名もないような雜草も、普賢の行願によって開花するとき、仏華莊嚴の世界が開顯されてくるのである。

このように華嚴經は普賢行によって莊嚴されるのであるが、中国においても華嚴經の信仰に生きる仏教者たちは、皆普賢行を修したという。たとえば、法蔵の華嚴經伝記の伝えるところによると、普濟は「普賢行を修して、賢首国に生れた」と伝えられ、杜順の弟子であった樊玄智は華嚴經を讀誦

することを業とし、この経によって普賢行を修したという。また法安は「普賢の境界、常に吾が前に現ぜり」とのべたといわれる。このように普賢行の实践者たちによって、華嚴經の信仰が伝持されてきたと思われる。なお『太平広記』卷一五には普賢社なる社邑についての記事が見られるので、普賢を中心とした結社が存在していたことが分る。

凝然は『法界義鏡』卷上において、
今華嚴宗別教一乘は、正しく定学を詮わし、専ら心觀を明せり。觀行の方法は、ただ此の経に在り。

とのべているが、別教一乘は定学、心觀を明らかにするのであり、華嚴經によって觀行の方法が確立するといっている。華嚴經にもとづいた觀行としては、法界觀門とか、妄尽還源觀とかいろいろあるであろうが、普賢觀行もその一つである。普賢觀行によって觀門を組織したものが、本論で取りあつかうところの華嚴經普賢觀行法門である。

この華嚴經普賢觀行法門（以下略して觀行法門と呼ぶ）は大日本統藏經一輯二編八套一冊のなかに収録されているものであるが、きわめて少部なものであって、果して法藏の真撰であるかも疑問とされるが、それらの問題をも含めつつ、その内容について論述したいと思う。

本書が経録にのせられたのは、比較的遅いようである。法藏の自選とされる『華嚴經伝記』(卷五)には、その書名が見えておらず、新羅の義湘に与えた書簡「賢首国師寄海東書」にも「如此無尽普賢願行」という言葉はあるが、これは書名でなく、書名目録のなかには、本書は収録されていない。もちろんこの義湘に与えた書簡は、「探玄記二十卷両卷未成」といわれているように、探玄記完成のすぐ前に出されたものであるから、法藏がその後この觀行法門を書いたとすれば、収録されていないのが当然である。このことは華嚴經伝記も、探玄記著述以前の撰述であるから、それ以前の著書には収録されないことは当然であるといわねばならない。

唐天復四年(九〇四)、崔致遠撰するところの『法藏和尚伝』にも本書は見られず、高麗沙門義天の撰する『義天録』には、

普賢觀一卷 法藏述

として、三昧觀・色空觀・華嚴世界觀などと一緒に収録されている。日本で撰述された経録では、七三四年(延喜十四年)に撰述された東大寺円超の『華嚴宗章疏并因明録』にも見あたらす、一〇九四年(寛治八年)撰述の興福寺沙門永超の『東域伝灯目録』にも見あたらすようである。ところが鎌倉時代の凝然の『五教章通路記』卷一を見ると、日本国に流伝した華嚴經の注釈書のなかで法藏の著書と見られるものについて、

今日本國所_三流傳_一者、探玄記二十卷・五教章三卷・旨歸一卷・綱目一卷・花嚴問答二卷・花嚴三昧章一卷亦名發菩提心章・花嚴雜章一卷・義海百門一卷亦名法界義海・遊心法界記一卷・法界還源觀一卷・花嚴策林一卷・閔脈一卷・花嚴三宝礼一卷・金師子章一卷・花嚴世界觀一卷・普賢觀行法門一卷・花嚴伝五卷・纂靈記五卷本是賢首所撰。干後靜法作之。此是竝就_三花嚴_一撰_レ之。

とのべている。これによると凝然は普賢觀行法門一卷をもつて、法蔵の著作としているが、普賢觀行法門または普賢觀なるものが、法蔵の著書としてとりあげられたのは、新羅の義天、および日本の凝然以後と考えなければならぬであろう。凝然の『法界義鏡』においても、

賢首大師作_三普賢觀行一卷、總為_三二門_一。一普賢觀、即十重止觀。二普賢行、即十重事行。今是其一。所_レ言十重止觀相者、一會_レ相_レ歸_レ性止觀、二依_レ理起_レ行止觀、三理事無礙止觀、四理事俱泯止觀、五心境融通止觀、六事融相在止觀、七諸仏相是止觀、八即入無礙止觀、九帝網重現止觀、十主伴円備止觀也。此觀亦名_三色空觀_一也。

とのべているが、これは普賢觀行一卷の内容を解説しており、現存の統蔵本、普賢觀行法門と比較すると、

- | | |
|------------|-------|
| 法界玄鏡 | 統蔵本 |
| (1) 会相帰性止觀 | 会相帰性門 |
| (2) 依理起行止觀 | 依理起行門 |

華嚴經普賢觀行法門について(鎌田)

- | | |
|-------------|-------|
| (3) 理事無礙止觀 | 理事無礙門 |
| (4) 觀事俱泯止觀 | 理事俱泯門 |
| (5) 心境融通止觀 | 心境融通門 |
| (6) 事融相在止觀 | 事融相在門 |
| (7) 諸仏相是止觀 | 諸法相是門 |
| (8) 即入無礙止觀 | 即入無礙門 |
| (9) 帝網重現止觀 | 帝網重現門 |
| (10) 主伴円備止觀 | 主伴円備門 |

となっており、ほとんど同じであるが、第七門において若干ちがっている。法界玄鏡所引の本では第七門が「諸仏相是止觀」となっており、統蔵本は「諸法相是門」であるから、「仏」と「法」とが異なっている。内容を統蔵本で見ると、一法即一切法を説いているのであるから、統蔵本の「法」とあるのが正しく、日本大蔵經所収の法界義鏡はミスプリントとも思われるが、あるいは凝然の見た異本には、諸仏相是門とあったのかも知れない。

さて華嚴觀行法門が法蔵の著書とされたのは、かなり時代が下ってからであり、それも朝鮮と日本の經典目録においてのべられているのであるから、果して法蔵のものであったかどうかということは、正確には不明であるといわねばならない。現存する統蔵本の觀行法門の序文を見ても、元祿元年に華嚴性闡黎なる人が古篋のなかよりこれを得て、上浣東山沙

門昇頭陀がこれに和訓を附して公刊したといわれているから、なおさら信用できない面がある。しかし法蔵の著とされる他の文献のなかで、普賢觀行について記述しているものがある⁽¹⁷⁾ので、その点について問題をさらに深めて見たいと思う。一部分は後人の人の筆になっていることは明らかであるが、大部分は法蔵の真撰であると思われる『華嚴經伝記』卷五に、

華嚴三昧觀一卷十門

右於上十門、亦各以十義、弁其所要。務令修成普賢願行、結金剛種、作菩提因。当來得預華嚴海會、用於天台法華三昧觀。諸修行者、足為心鏡耳。沙門法蔵所述⁽¹⁸⁾。

とあるが、ここで華嚴三昧觀の十門によって、普賢願行を修成せしむとあるから、華嚴三昧觀の十門こそが、普賢願行の十門となるのである。この華嚴經伝記の文は、永超の東域伝灯目錄⁽¹⁷⁾のなかで、華嚴三昧觀一卷をあげたところに、引用してあるので、華嚴三昧觀が普賢願行の実修を説いたことは、広く知られていたであろう。

それでは華嚴三昧觀とは何か。古来から華嚴三昧觀がどのようなものであるのか、不明であったが、常盤大定博士⁽¹⁹⁾の御

華嚴發菩提心章

第一会相歸性門、於中有二種、一於所

緣境会事歸理、二於能緣心、攝將入正也

華嚴三昧章

第一会相歸性門、於中有二種、一於所

緣境会事歸理、二於能緣心、攝散入止也、

研究によつて、華嚴三昧觀とは華嚴三昧章であることが明らかとなった。華嚴三昧章には、朝鮮で発見され民国六年秋九月、金陵刻經処より出されたもの⁽²⁰⁾、栴尾高山寺所蔵の宋版華嚴三昧章⁽²⁰⁾などがあるが、さらに發菩提心章との關係から、書誌学的にも、内容的にも複雑な關係がある。發菩提心章そのものにも、寛元三年正月十六日、東大寺西塔院において、権少僧都宗性の書写したもの⁽²¹⁾や、大正大蔵經や大日本統蔵經に収録されている栴尾本などがあり、また別に、奈良東大寺図書館蔵の『華嚴經發菩提心義』一卷⁽²²⁾などもあり、それぞれ異つた箇所もあつたり、澄觀によつて増厚されたと思われる部分⁽²³⁾もあつて、いろいろと問題の存するものである。これらの書誌学的な研究や、内容の原典批判的研究については、他日稿を改めて考究したいと考えているので、ここでは省略し、とくに觀行法門との関連から問題となるところの「色空章十門止觀」との関連性のみを考えてみたい。

つきに大正大蔵經本・華嚴發菩提心章、高山寺蔵・宋版華嚴三昧章、統蔵本・普賢觀行法門の三者の比較対照をしてみたい。

普賢觀行法門

第一会相歸性門、謂觀一切法自性皆空、

分別解了、一念行心、称理、而觀攝散入静名止、

第二依理起事門者、亦有二種、一者所歸理、非斷空、故不礙事相宛然、二者所入止、不滯寂、故復有隨事起修妙覺觀、

第三理事無礙門者、亦有二種、一由習前理事、能通交徹故、今無礙也、二雙現前故、遂使止觀、同於一念頓照故、

第四理事雙絕門者、由事理雙觀。互相形奪故、遂使而雙俱盡、非理非事、寂然雙絕、是故令止觀雙泯、迥然無寄也、

第五心境融通門者、即彼絕理事之無礙、境與彼泯、止觀之無礙心、二而不二故、不礙心境、而冥然一味、不二而二故、不壞一味、而心境兩分也、

第六事事相在門者、由理帶諸事、全通一事、是故以即止之觀、於一事中、現一切法、而心無散動、如一事一切亦爾、

第七彼此相是門者、由諸事悉不異於理、

第二依理起事門者、亦有二種、一者所歸之理、非斷空故、不礙事相宛然、二猶所入止、不滯寂故、復有隨事起修妙觀、

第三理事無礙門者、亦有二種、一由習前理事、能通交徹、令無礙故、二雙現前故、遂使止觀、同於一念頓照故、

第四理事雙絕門者、由事理雙現。無相形奪故、遂使兩相俱盡、非理非事、寂然四絕、是故令止觀雙泯、迥然無寄也、

第五心境融通門者、即彼絕理事之無礙、境與彼泯、止觀之無礙心、二而不二故、不礙心境、而冥然一味、不二而二故、不壞一味、而心境兩分也、

第六事事相在門者、由理帶諸事、全徧一事、是故以即止之觀、於一事中、現一切法、而心無散動、如一事一切、亦爾、

第七彼此相是門者、由諸事悉不異於理、

第二依理起行門、謂以所觀真理、非斷空故、不礙事法、宛然顯現、是故令止不滯寂、寂不礙事、於事無念、起照名觀、

第三理事無礙門、謂由性實之理、必徹事表、而自現、不壞於事、相虛之事、必該真性、而自立、亦不翳於理、理事混融、二而不二、是故菩薩、於一念中、止觀雙運、無礙同觀、

第四理事俱泯門、謂由理事交徹、形奪兩亡、則非事非理、超然迥絕、行心順此、非觀非止、迥絕無寄、經云、法離一切觀行、

第五心境融通門、謂彼絕理事之無礙、境與泯止觀之無礙心、二而不二、冥然一味、不二而二、心境宛然、

第六事融相在門、謂以多事全、依於一理、一理帶多事、而全徧於一事、是故菩薩、以即止之觀、於一事中、見一切事、而心無散動、如一事、一切亦爾、

第七諸法相是門、謂由諸法、皆不異於

理復不異於事、即是一切、而念不乱、如一事一切亦爾、

理復不異於事、即是一切、而念不乱、如一事一切亦爾、

真理、真理復不異於事、是故菩薩、以不異止之觀、見一法即一切法、而全不動如一、一切亦爾、

第八即入無礙門者、由交參非一与相、含非異体無二故、是故以止觀無二之智、頓現即入二門、同一法界、即心無散動也、

第八即入無礙門者、由交參非一与相、含非異体、無二故、是故以止觀無二之智、頓現即入二門、同一法界、即心無散動也、

第八相入無礙門、謂由以一多相入、而非一、一多相即、而非異、此二俱由融通一法界、是故菩薩、以無念之智、頓見於此無障礙之法、

第九帝網重現門者、由於一事中、具一切、復各具一切、如是重重不可窮尽、如一事既爾、余一切事亦然、以止觀心境不異之目、頓現一切、各各重重、悉無窮尽、普眼所矚、朗然現前、而無分別、亦無散動也、

第九帝網重現門者、由於一事中、具一切、復各具一切、如是重重不可窮尽、如一事既爾、余一切事亦然、以止觀心境不異之目、頓現一切、各各重重、悉無窮尽、普眼所矚、朗然現前、而無分別、亦無散動也、

第九帝網重現門、謂於一事中、所現一切、彼一切内、復各現一切、如是重重不可窮尽、如帝釈網、於一珠中、現一切珠影、一切珠影中、復現珠影、重重無尽、是故菩薩、以普賢眼、頓見如此法界、円融自在、無有限量、

第十主伴円備門者、菩薩以普門之智、頓照於此普門法界、然拳一為主、一切為伴、主伴伴主、皆悉無尽、不可称説、菩薩三昧海門、皆悉安立自在無礙、然無異念也、

第十主伴円備門者、菩薩以普門之智、頓照於此普門法界、然拳一為主、一切為伴、主伴伴主、皆悉無尽、不可称説、菩薩三昧海門、皆悉安立自在無礙、然無異念也、

第十主伴円備門、謂菩薩以普賢之智、頓見於此普賢法界、是故凡拳一門為主、必攝一切、為伴、如是無尽、無尽、不可称説、思之可見、此略説顯華嚴經中菩薩止觀、広如別記説

以上の三本を比較してみたが、この比較対照からは、観行法門が発菩提心章にもとづいて作られたのか、華嚴三昧章によったのか、ということとは明らかにすることができない。たとえばあきらかに思想的に異るところの第四理事俱泯門のな

かの「寂然雙絶」（発菩提心章）、「寂然四絶」（華嚴三昧章）、「超然迥絶」（観行法門）の三つを比較しても、三本とも異なっており、観行法門がいずれによったかは、これを明らかにすることができないのである。また思想的に特質のある華嚴

三昧章の寂然四絶^〇については次節においてのべてみたい。

三

つぎに普賢觀行法門の内容についてのべて見たい。本書は初めに普賢觀を明らかにし、ついで普賢行を説いている。ところで普賢(Samantabhadra)とは何かということであるが、華嚴学的な解釈としては、法蔵の解釈が要にして簡である。法蔵は普賢について、

德、法界に周ねくを普と曰い、用、成善に順ずるを賢と稱す⁽²³⁾。

とのべているが、徳は法界に周遍してあますところなく、そのはたらきは善行を成ずるから普賢と稱するという。凝然は徳、法界に周ねくを普と曰い、至順調善なるを賢と曰う。普賢は即ち是れ等覺大士なり。因人の上首なり。機縁、終に窮むるは、此を以て始となす。

一切の普機、凡聖を簡ばざるを、皆普賢と名く。普法を信ずるが故に。普法を解するが故に。普法を行ずるが故に。普法を証するが故に。人既に普賢なり、法も亦、普賢なり。総じて之を言わば、普賢菩薩とは諸仏の大源なり。諸法の体性なり⁽²⁵⁾。

とのべている。普法を信じ、普法を解し、普法を行じ、普法を証するから普賢であるという。それでは「普法」とは何か

というならば、華嚴の相即相入の原理をいうのである。普法については新羅の表員の『華嚴經文義要決問答』卷二のなかにつぎのように説かれている。

普とは溥なり。謂く、遍の義これ普なり。法とは自体の義なり。軌則の義なり。謂く一切法の相入・相是なり。相入と言は、暁云く、一切世界、一微塵に入り、一微塵、一切世界に入る。三世諸劫、一刹那に入り、一刹那、三世諸劫に入るを謂うなり。諸の大少、相入を促すが如く、余の一切門の相入、亦爾なり、相是を説くが如きも亦爾なり。一切法及び一切門、一是れ一切、是れ一如、是れ広蕩なるを謂いて、名けて普法と為すなり⁽²⁶⁾。

これを見ると、普法とは一即一切、一切即一なることをいうのであり、それを理解し、覺証した者が普賢でなければならぬ。いわば華嚴思想の理解者、実践者こそが普賢である。ところでこの普賢も三乗の普賢と一乗の普賢があるといわれる。華嚴宗の第二祖智儼は『孔目章』卷四のなかで、「普賢行品普賢章」をたてており、

普賢とは大いに分つに二有り。一には三乗の普賢なり。二には一乗の普賢なり。三乗の普賢とは、一に人、二に解、三に行なり。初めの人とは、法華經の象に乗りて行者の前に至るが如きは、是れ其の人なり。二に解とは法華經の廻三帰一等の如きは、即ち是れ一乗に趣向するの正解なり。

三に行とは法華經の普賢品を説き、普賢品を明すが如し。普賢行を明すが即ち是れなり。

二には一乗の普賢、亦三有り。一には人。第四十五知識の普賢是れなるを謂う。二には解。即ち普賢品の六十行門、各々皆普遍し、及び漸次に深深深深深深深深にして、及び因陀羅微細事等に等しきなり。三には行。即ち離世間品の十種の普賢心なり。十種の普賢願行法なり。²⁷

とのべ、三乗の普賢と、一乗の普賢とを明らかにし、さらに普賢に人、解、行の三つをたてて説明している。三乗の普賢は法華經の普賢であり、華嚴經の普賢を一乗とする。さらに華嚴經のなかでも、入法界品の四十五善知識の一人が普賢の人、普賢品の普賢の解、離世間品の十種普賢心が普賢の行であるといっている。なおここで普賢行を深めようとする情熱が、「深」という字を十回用いていることによって、明白に観取することができる。華嚴宗第五祖澄觀も『華嚴經疏』²⁸第五のなかで、さまざまな角度から普賢の語義解釈をしているが、根本的には法藏の理解と別なものではない。

ところで本書の前半は普賢觀を明らかにするのであるが、それは前節の比較対照文であきらかなように、色空章十門止觀と非常によく似た構造からなりたっているので、それらと対照しながら内容を考えて見たい。

(1) 会相帰性門では、一切法の自性、皆空なりと觀じ、一念

の行を分別解了して、心が理に称うことが觀であり、散乱する心を摂して静に入るのが止であると説く。十門止觀では所縁境と能縁の識との二つに分けて説いているが、觀行法門では能所に分けていない。(2) 依理起行門では、一切法空なりといっても、それは断空ではないから、一切の現象の事法が宛然²⁹として顯現していることを障たげるものではないという。

「止」といっても、空寂にとどまるものではなく、また一切の事物を、無念の立場から照すのを觀とする。三昧章で「事に随つて起り、妙觀を修する」とのべているのと内容的には同一であろう。(3) 理事無礙門では、真如性実の理が、必らず事表に徹して自ら現じ、事を壊することなく、相虚の事もまた、真性を該ね、しかも自立して、理をかくさないことによる。理と事が混融して不二なるところをいう。妄尽還源觀などに「真は妄末を該ね、妄は真源に徹する」³¹などというのと同じものである。(4) 理事俱泯門では、理事交徹し、形奪兩亡することによって、事にも理にもあらざる点をさしており、超然として迥かに絶する境地をいうのであり、この場合において、「非止非觀」となる。ここで「無寄」とあるが、澄觀の『法界玄鏡』に

百非斯絶故、迥絶無寄。³²

とか、

迥絶無寄、般若現矣。³³

とあるのと同じ考え方を示している。いわゆる法界觀門の泯絶無寄觀に相当する。なお高山寺藏、宋版華嚴三昧章所引の十門止觀の、第四理事雙絶門のなかには、

寂然四絶、是故令止觀、雙泯迥然無寄也。

とあって「四絶」なる表現が見られる。四絶なる言葉はもともと、僧肇の肇論あたりに用いられた言葉であり、三論宗においてしばしば用いられるものであるが、澄觀の演義鈔にもあらわれている。拓本妙覺塔記によると、澄觀が修学時代「長安四絶論」なる書を読んだことが伝えられているが、華嚴三昧章に「四絶」なる表現が見られることは、華嚴三昧章の性格や、撰述年代を考えるうえにも重要な意味をもつのではないかと思われるが、その点については、他日稿を改めて考えて見たい。なお(4)事理俱泯門には、その最後に、

經云、法離一切觀行。

と經典を引用しているが、この經が何經であるかは、現在のところ確かめていない。

つぎの(5)心境融通門では、理事を絶した無礙なる「境」と、止觀を泯じた無礙の「心」とは、二にして不二、不二にして二なるものであるという。境と心とが不二なる時、冥然一味となり、境と心とが二なる時、心境宛然たるのである。この心境不二の考え方も、澄觀の法界玄鏡に、

今心与境冥、智与神会、亡言虚懷、冥心遺智。⁽³⁵⁾

とあるものと通じる。もちろん心と境との融通の思想は、法藏と同じく武周朝に活躍した北宗の神宗の思想にも存するものであり、たとえば北宗殘簡には、

心不礙境、是根不礙塵、境不礙心、是塵不礙根。心不礙境、境不礙心、離境、離心、離塵、離染。⁽³⁶⁾

とあって、心と境との無礙なる点をのべている。法藏の妄尽還源觀の六觀のなかの攝境、歸心、真空觀と從心、現境、妙有觀や、心境秘密円融觀もこれと同じ考え方のうえにたっている。法藏は心境秘密円融觀を説明して、

三者心境秘密円融觀、言心者、謂無礙心、諸仏証之以成法身。境者、謂無礙境、諸仏証之以成淨土。謂如来報身、及所依淨土、円融無礙、或身現刹土。⁽³⁷⁾

とのべているが、北宗禪の教説ときわめて類似している。

ところで牛頭法融の「心銘」を見ると、

心。処無境、境。処無心、將心滅境、彼此由侵、心寂境如、不遣不拘、境随心滅、心随境無、兩処不生、寂靜虚明。⁽³⁸⁾

とあって、この觀行法門の所説とまったく同じことをのべている。そのほか荷沢大師の顯宗記を見ても、

心如境謝、境滅心空、心境雙亡、体用不異。⁽³⁹⁾
とあり、澄觀の「心要」にも、

是非兩亡、能所雙絶、斯絶亦寂、則般若現前。⁽⁴⁰⁾

などと見えている如く、禪宗においても心境兩亡の立場は説

かれていますのである。(6)事融相在門はすべての事は一つの理に依り、一つの理には多事が内包されているため、菩薩は止に即するの觀をもつて、一事のなかに一切事を見、心に散動が無いという。(7)諸法相是門では、諸法は皆、真理と異ならず、真理もまた事と異ならないために、菩薩は止と異なることのない觀をもつて、一法即一切法を見るのであり、動ぜざることは一の如しとなる。(8)即入無礙門では、一多相入するも一つにはならず、一多相即するも異ならないから、一法界に融通するため、菩薩は無念の智をもつて、頓にこの無障礙の法を見るのである。無念の智とあるが、荷訳神会の「無念為宗」を想起せしめるものがある。(9)帝網重現門では一事のなかに一切の現するのを見、さらに一切のなかにまた一切を現じ、このようにして重重無尽、窮まるところのない世界が、あたかも帝釈網のなかの一粒のなかに一切の珠の影が現するようであることをいう。この時菩薩は普賢の眼をもつて頓に法界の円融自在にして限りなきを見るところという。(10)主伴円備門では、菩薩は普賢の智をもつて、頓にこの普賢法界を見、一門をあげて主とすれば、必らず一切を摂して伴とし、主伴交錯し、円融無尽となると説いている。以上のべた十門が菩薩の止觀の内容であるとする。これを華嚴三昧章では、菩薩三昧海門」としている。この普賢觀には、中唐の澄觀などの学説と一脈通じる面が多く見られるのであるが、それは中唐

の仏教を考えるうえにも、重要であると思う。

つぎに普賢行法を十門にわたって説くのであるが、法蔵は探玄記卷十六の「普賢菩薩行品」の注釈にさいしても、普賢行の宗趣を十門に分けて説いている。すなわち

宗明普賢行、略有十種、一達時劫、二知世界、三識根器、四了因果、五洞理性、六鑒事相、七常在定、八恒起悲、九現神通、十常寂滅、此上十種各有十門^⑩。

と十門に開いてのべているが、この觀行法門のように実践的性格を強く出したものではない。普賢觀行法門においては、(1)先起信心、(2)帰依三宝、(3)懺悔宿罪、(4)発菩提心、(5)受菩薩三聚淨戒、(6)修離過行、(7)修善行、(8)修忍辱行、(9)救攝衆生、(10)修平等行の十種を説く。(1)先起信心においては、信心に三種ありとしているが、第一にはみづから我々の本性である如来蔵性を信ずること、その本性たる如来蔵性を開發すること、すなわち修行によって成仏ができるとする。第二には三宝を信ずる。三宝の功德は殊勝であり、この三宝を離れて、別に帰依すべきものはないという。なお三宝については、別に華嚴雜章門のなかに三宝章があるので、それとあわせ研究すべきである。第三は因果を信ずる。因果の道理は歴然としており、業報は必然であるから、悪を捨てて、善を修しなればならないという。この三種の信心の第一種の如来蔵性を信ずるといふのは、大乘起信論の修行信心分において、信心

を説くに四種ありとしている第一に相当するものである。すなわち、起信論では、

一には根本を信ず。所謂、真如法を樂念するが故に。⁽⁴²⁾
とあるのを受けたものであろう。

つぎに、(2) 帰依三宝も三種ある。一には徧法界の三宝に帰依する。二には不惜身命の決意をもって帰依する。三には帰依すること未来際を尽くし、誓って断絶しないことである。

この帰依三宝の文も、起信論に、

三には善根を發起し增長する方便なり。謂く勤めて三宝を供養し礼拝す。諸仏を讚歎し、隨喜し、勸請す。三宝を愛敬し、淳厚心を以ての故に。信增長することを得るなり。⁽⁴³⁾

とある点と共通した一面があるといえよう。

(3) 懺悔宿罪にも三種ある。一には十方三世一切諸仏・菩薩・賢聖に啓告する。二には尊像及び衆僧の前に対する。三には慙重心と慚愧心をもって自から無始の罪障をのべる。天台の『菩薩戒義疏』⁽⁴⁴⁾ 卷上に、「像聖」のことがのべられているが、尊像及び衆僧の前に対することは、当然のことであつたと思われる。この(3)も起信論にもとづいていること明らかであり、起信論に、

所謂、仏の色相を見て、其心を発す。或は衆僧を供養するによりて、其の心を発す。或は二乗の人に教令するに因りて発心す。⁽⁴⁵⁾

とある点などにもとづくのであろう。

(4) 菩提心を発して大誓願を立てる条も、三種ありとするが、これはまさしく起信論と同文である。すなわち、つぎのようになる。

大乘起信論

復次信成就発心者、発何等心、略説有三种、云何为三、一者直心、正念真如法故、二者深心、樂集一切諸善行故、三者大悲心、欲拔一切衆生苦故、

普賢觀行法門

發菩提心、立大誓願、亦有三種、一發直心、正念真如法故、二深心、樂修一切諸善行故、三大悲心、救拔一切苦衆生故、

この両者を比較すると、一目瞭然、觀行法門が起信論にもとづいていることが分るのであろう。潛真(七一―八八)の著とされる『菩提心義』⁽⁴⁶⁾にもこの起信論の三心が引用されているし、とにかく起信論の三心は広く用いられていたようである。

(5) 受菩薩三聚淨戒では摂律儀戒と摂善法戒と摂衆生戒の三戒を説いている。法蔵の起信論義記卷下末では、(4) 發菩提心の三心を説明し、

故に上に略説して三と云うなり。此れ即ち三聚戒をもっての故に。⁽⁴⁷⁾

とあるが、この三心と三聚戒との關係をそのまま敷衍しての

べたのが、この觀行法門の(4)と(5)に相当するようである。もともとは三聚淨戒なる言葉は華嚴經にも用いられており、たとえば、唐訳華嚴經卷二七の十廻向品には、

常に自ら三種淨戒に安住し、亦衆生をして是の如く安住せしむ。⁽⁴⁸⁾

などと用いられている。しかし華嚴經では三聚淨戒を説くが、その摂律儀戒は十善戒を内容とするものといわれている。⁽⁴⁹⁾ 中国仏教で三聚淨戒が広く一般の人々にまで信仰されたのは、隋の靈裕の時代であるといわれるが、法蔵の華嚴經伝記に、

遂号為裕菩薩也。皆從受戒、三聚大法、自此広焉。⁽⁵⁰⁾

とあることによつて、それが理解できる。この点から見ても、華嚴經の流通と三聚淨戒とは密接な関係があったことが知られるであろう。三聚戒については、隋浄影寺慧遠も大乘義章⁽⁵¹⁾のなかで項目をたてて論究しており、華嚴宗関係では、智儼も孔目章⁽⁵²⁾のなかで論じているとおりである。智儼は三聚淨戒の種類が四ありとし、瑜伽論の四波羅夷、瓔珞・梵網經の十無尽戒、方等經の二十四戒、十地經の十善法戒⁽⁵³⁾の四種をあげている。本条において三聚淨戒をあげていることも華嚴としては当然であるといえる。

つぎに(6)修離遊行も三種に分け、一には煩惱を調伏し、貪瞋邪を離れる。二には諸の不善を止め、殺等の十惡道を離れ、

三には菩薩の十重四十八輕戒を一一護持して、犯すことがないようにする。若し犯したものは、直ちに懺悔して、清淨ならしめる。ここで十惡道が説かれているが、孔目章にも十惡業道章⁽⁵⁴⁾があつて、十惡道が説かれている。(7)修善行も、三宝供養と六ハラミツ⁽⁵⁵⁾の実践が説かれているが、これも起信論の六ハラミツ⁽⁵⁶⁾の説相を受けたものと思われる。さらに(8)修忍辱行、(9)救摂衆生、(10)修平等行もすべて起信論の修行信心分などに説かれている内容と共通する一面をもっている。

四

以上、普賢觀行法門の内容を簡単に説明したのであるが、普賢觀は華嚴三昧章や、発菩提心章の菩薩の十種止觀にもとづいていること明らかであり、後半の普賢法は、大乘起信論に説かれた菩薩の実踐法をのべている如くである。この普賢觀行法門が法蔵の真撰であるのかどうかは、はっきり分らないが、そのもとづくところはある程度明確になつたと思う。さらに後半の普賢行については、占察善惡業報經などと比較しなければならぬであろう。法蔵のその他の著作と、めんみつな比較検討がおこなわれなければ、十分に本書の性格を明らかにすることはできないので、いわば中間的な報告にとどまらざるを得なかつたが、一つの方向づけはできたかと思う。また李通玄の華嚴經論などとの比較検討などもなされなければ

ば、法藏の真撰か否かを明確にすることはできないので、今後の課題として考えている。

15 華嚴經伝記卷五に「今在西大原寺僧賢首処、守護供養焉」(大正蔵五一卷一七一頁上)とあることなどが、疑問とされる点である。

1 仏陀華嚴については、川田熊太郎博士「仏陀華嚴」(『華嚴思想』、法蔵館、昭和三五年二月)参照。なお普賢行については、金子大栄氏『華嚴經概説』収録の「普賢行と空觀」に教えられるところが多い。

2 大正大蔵経十卷七三頁下〜四頁上。

3 同卷。

4 華嚴經伝記第一(大正蔵五一卷一五三頁下)「大智度論云、不思議經有十万偈、撰大乘論云、有百千偈、名百千經、釈論云、即華嚴經十万偈、為百千也、又涅槃經、名此經為雜華、然百千偈數而標目、雜華即相以彰名、偈數者失其源、即相者遺其主、不思議則推宗有在、直造其庭、仏華嚴則以人標法、

5 華嚴經伝記卷四(大正蔵五一卷一六五頁中)

6 同(一六六頁下)

7 同(一六九頁上)

8 日本大蔵経、華嚴宗章疏下、五九一頁上。

9 大正大蔵経五二卷一七二頁中。

10 大日本統蔵経一輯二編八套五冊、四二二丁左上。

11 石井教道『華嚴教学成立史』(一九六四年二月、石井教道博士遺稿刊行会)。

12 大正大蔵経五五卷一一六六頁下。

13 同七二卷二九六頁下。

14 日本大蔵経、華嚴部章疏下、五九三頁下。

華嚴經普賢觀行法門について(鎌田)

16 大正蔵五一卷一七二頁中。

17 同五五卷二四六頁上。

18 常盤大定博士『支那仏教の研究』(春秋社、昭和十三年六月)、三五四頁以下。

19 華嚴三昧章一卷、新羅崔致遠作賢首伝、

「用華嚴三昧觀直心中十義配成十科、証知此章即觀文也、東洋刻本改其名為發菩提心章、於表徳中、全録杜順和尚法界觀文、近三千言、遂疑此本非賢首作、庚子冬、南条文雄遊高麗、得古写本、郵寄西來、首題華嚴三昧章、讎校尽善、登之黎棗、因來本作章、故仍其旧、尚有華嚴世界觀、求而未得也 石埭楊文會識」

20 高山寺所蔵、宋版華嚴三昧章は、昭和九年五月、常盤大定博士によって発見されたが、三好鹿雄氏による筆写本が、現在東京大学東洋文化研究所に所蔵されている。

21 本書はもと結城令聞氏所蔵本であるが、その写本が同じく東京大学東洋文化研究所に蔵されている。

22 三好鹿雄氏による写本の最後に、常盤博士の「此発心章異統蔵所収本、蓋是華嚴三昧章及流布本発心章、兩者中間之者也」という跋文がある。

23 石井教道『華嚴教学成立史』(一九六四年二月、石井教道博士遺稿刊行会)三〇五頁。その文は「然此具徳門中、一法法爾、性具善惡、故経曰、於一微塵中、各示那由他無数億諸仏、於中

而說法、於一微塵中、現無量仏国、須弥金剛圍、世間不迫作、於一微塵中、現有三惡道天人阿修羅、各各受業報、如斯並是實事、非變化作、是法性実徳、法爾如此也、如上之義、去情深思可知、然此十門同時相応、為一縁起、就初門中、有十義円融、隨一各具余一切義、如初門既爾、余理法隱顯等九門亦然、但隨門異耳、是故一一門中、各有十百千等、思之可見」(大正蔵四五卷六五五頁下、六頁上)である。

24 探玄記卷十六(大正蔵三五卷四〇三頁上)

25 五教章通路記卷二(大正蔵七二卷三〇六頁中)

26 大日本統蔵經一輯一二套四冊、三三六丁右、七丁左上。

27 孔目章卷四(大正蔵四五卷五八〇頁中)

28 華嚴經疏卷五(大正蔵三五卷五三五頁中)

「言普賢者、体性周遍曰普、隨縁成徳曰賢、此約自体、又曲濟無遺曰普、隣極亜聖曰賢、此約諸位普賢、又徳周法界曰普、至順調善曰賢、此約当位普賢、又果無不窮曰普、不捨因門曰賢、此約仏後普賢、位中普賢、悲智雙運、仏後普賢、智海已滿、而渾即智之悲、寂而常用、窮未來際、又一即一切曰普、一切即一曰賢、此約融攝、所以先列者、為上首故、法門主故、法界体故」宛然華嚴學ではよく用いられ、たとえば法蔵の妄尽還源觀にも「謂塵無自性即空也、幻相宛然即有也」(四五卷六三八頁上)などである。

30 「表」についても、妄尽還源觀に「真空具徳、徹於有表」(六三八頁中)などである。

31 大正蔵四五卷六三七頁下。

32 同、六七五頁下。

33 同卷、同頁。

34 拙著『中国華嚴思想史の研究』(東京大学出版会、昭和四十年)、一五一頁以下参照。

35 大正大蔵経四五卷六七五頁下。

36 字井伯寿『禅宗史研究』(岩波書店、昭和四十年再刊)、四九〇頁。

37 大正大蔵経四五卷六四〇頁上。

38 景德伝灯録卷三十(大正蔵五一卷四五七頁下)

39 同、五一卷四五九頁上。

40 同、四五九頁下。

41 大正蔵三五卷四〇三頁中。

42 大正蔵三二卷五八一頁下。

43 同、五八〇頁下。

44 菩薩戒義疏卷上(大正蔵四〇卷五六七頁下)

「一真聖、二像聖、真者、謂十地等大士、对此為縁故、宣発戒、像聖者、謂金銅等作菩薩像」

45 大正蔵三二卷五八〇頁下。

46 潜真、菩提心義(大正蔵四〇卷九八七頁中)

「起信又云、発何等心、略説有三、一者直心、正念真如法故、二者深心、樂集一切諸善行故、三者大悲心、欲拔一切衆生苦故」

47 大正蔵四四卷二七九頁上。

48 大正蔵十卷一四九頁中。

49 平川彰博士「華嚴経に見られる初期大乘徒の宗教生活」(川田熊太郎監修、中村元編『華嚴思想』収録)参照。

50 大正蔵五一卷一六〇頁上。

51 大正藏四四卷六五九頁上以下参照。

52 同四五卷五六四頁上中。

53 孔目章卷二に「十善業道章」あり。「十善者、翻前十惡成十善也、善義不同、有其五種、一人天十善、二声聞十善、三緣覺十善、四菩薩十善、五仏十善、問、既十善五重、十惡亦応同其十善、答、由善義順理、理法甚深故、有五重、不等惡業、不善從麤相、別諸思生故、但有一種、無五重別、此十善業、由附觀智、智既漸深、福亦漸細、故不同也。」(大正藏四五卷五六五頁中)

51 大正藏四五卷五六四頁中下、五頁上。

55 「随順修行檀波羅蜜、以知法性無染、離五欲過故、随順修行尸波羅蜜、以知法性無苦、離煩惱故、随順修行羶提波羅蜜、以知法性、無身心相、離懈怠故、随順修行毘梨耶波羅蜜、以知法性常定体無乱故、随順修行禪波羅蜜、以知法性体明離無明故、随順修行般若波羅蜜、」(大正藏三二卷五八一頁上)

補1 華嚴經普賢觀行法門序

「此書乃法藏大師所製、為顯普賢觀行之宗趣也。其文簡而義無_レ尽。其科要而理融通、學者当_レ尽_レ心焉。一日華嚴性闡梨、觀誦之暇、偶得_レ之古篋、持以示_レ余。余欣然展讀數四、而后欲_レ寿_レ梓以公_中海内_上。且傍施_レ和訓、將使_レ末學者易_レ解。云猶有_レ未_レ正之處、更俟_レ後之識者。」

元禄元年歲在戊辰春三月、上澆東山沙門昇頭陀拜書」(大日本統藏經一輯二編八套、一冊、七三丁左上)